

熊浩一氏(1985)、富田和夫氏(1996)、大屋道則氏と栗岡潤氏(1998)などによる詳細な分析研究がある。

鈴木氏の示された変遷傾向を受け、赤熊氏は口縁部の形態が屈曲(内屈)→内湾→直立と推移するとした。

また、在来の模倣壺とは形態上に大きな差異が認められることから、その出自を金属鏡に求めている。この

(2) 小針型‘系’壺の細分と変遷(第430図)

上述のように、蓋壺模倣壺のうち比較的大型で、口縁部が大きく開くものを壺II類とした。厳密な意味では、白色系の堅緻な焼成のものを「小針型壺」というべきであるが、ここでは同形態で赤橙色系のやや軟質なものも含め、「小針型‘系’壺」と総称して分類の対象とする。

壺II A類 体部が浅く、長い口縁が外湾しながら開くものである。体部は小さめで、口縁部との作り分けは明瞭である。

初現となる1段階では、第I類の模倣壺と形態上大きな相違はないが、法量的には口径15cm、器高5.8cmとかなり大型である。その後、口径は16~17cmと拡大し、口縁部は大きく開いていく。このため、全体に潰れた印象が強くなる。5段階になると小型化し、口径は15cmほどとなる。口縁はさらに外反し、より扁平なものとなる。

壺II B類 体部は丸みを有し、短い口縁が外湾しながら開くものである。体部と口径の変化から、次の3系列に分化できる。この場合、B2類とB3類はB1類からの派生と捉えた。

B1類は大きめ体部で、口縁部との境はしっかりと作り出される。器高に対する口縁部と体部の割合は、およそ1対1を踏襲する。口径も大きな変化はなく、16cm台を中心変遷する。扁平化は進行するものの、口縁部の外反はあまり大きくならない。作りがやや粗雑なため、類型としての統一感は薄い。やはり5段階に至って小型化する。

B2類は口縁部が短く、体部は深めである。両者の作り分けはB1類よりもやや弱く、口縁部の外反は小さい。口径は3段階で15cm前後、4・5段階で16~17

ほか、出現が突発的(7世紀中葉)であること、初現段階から法量分化されていること、供膳具としてそれまでの模倣壺にとって変わることなど、極めて特徴的な壺類といえる。

分布は有段口縁壺同様、埼玉県北部から群馬県の平野部に及んでいる。

cm台である。扁平化への推移は認められるが、口径や4cm強と低い器高の変化は小さい。

B3類は体部が小さく、口縁部が外湾しながら大きく「八」の字状に開く。直線的に立ち上がりてくる体部と、大きく広がる口縁部は緩い「く」の字を描き、境となる外面の沈線は不明瞭である。口縁端部は平坦で、沈線を有するものも見られる。体部は2段階では深いが、3~4段階と経るに従い次第に浅くなり、口径の大型化と相俟って扁平化が急速に進む。口径は2段階で17cm強程度であったものが、3段階では18cm台になる。しかし、4段階では17cm台に逆転し、5段階に相当するものは見受けられなくなる。小型化が他よりも一段階早いことと関係するのだろうか。

大型で扁平という点ではII C類と共に他を圧倒し、小針型‘系’壺を象徴するタイプといえる。

壺II C類 体部は浅く小さめで、長い口縁が外湾しながら開くものである。B類に含めるべきとも思われるが、体部に対して口縁部がかなり長いため、これを分化した。

両者の境はB3類よりも屈曲が強く、外面の沈線もはっきりしている。口縁部は体部から一旦直立し、そこから大きく外反する。端部は平坦なものが多く、沈線の加わるものも少なくない。体部の立ち上がりはB3類に比して丸みを帯び、器壁は口縁部よりも薄い。

2・3段階で15~17cmだった口径は、4段階で17~19cmへと大型化する。これは口縁がより外方へ開いたためで、体部は潰れながらも、大きさとしての変化はほとんどない。5段階ではやはり小型化し、口縁部はさらに外反、扁平な器体となる。

壺II D類 浅めの体部から、口縁が直線的に大きく

外反するものである。器高に対する体部と口縁部の割合はおよそ1対1で、両者の境となる屈曲部の沈線は明瞭である。

D1類は体部と口縁部の屈曲がやや強く、口縁部はわずかに外湾気味となる。口径15cm前後、器高4cm強と小型である。

D2類は器壁の屈曲がほとんどなく、口縁部の広がりは直線的で踏ん張りがある。口径17cm前後、器高5cm以上と大型である。

ともに4段階以降は不明となる。6・7段階に1点ずつを置いてみたが、系列として追えるか否か疑問である。6段階とした第418号住居出土のものは口縁部がやや肥厚しており、坏II類とするよりも、児玉地域などの坏に近縁性を求めるべきかもしれない。

坏II E類 丸みの強い深い体部に、短く外湾する口縁部を有するものである。器壁の屈曲は弱く、体部と口縁部の境ははっきりしない。

1段階から認められるが、2～3段階で扁平化し、4段階では見られなくなる。口径は15～16cmでほぼ一定している。

坏II F類 長い口縁が一旦直立し、端部が内湾気味となるものを一括した。体部が浅いものや深めのもの、大型のものや小型のもの、また口縁の開き方などでいくつかに分けられるようである。系列としての統一性はごく乏しい。

5段階の3点は異質で、別の系統を考えたほうがよいかかもしれない。

坏II G類 丸みのある深めの体部から、短めの口縁が強く外湾して開くものである。焼成や塗彩などから、3つの系列に分けられる。

G1類は体部が深く、丸みを帯びるものである。口縁部は短く、強く外湾して開く。体部と口縁部の屈曲はきつく、境は明瞭に作り出される。

G2類は体部がやや浅く、平底風の安定感を持った器体である。口縁部の外反度は弱く。端部は先鋒となる。

何よりもG2類で特異なのは、内外面が赤色塗彩さ

れ、しかも胎土や焼成が比企型坏と同一であるという点である。このように、比企型坏の特徴を備えたものであるならば、白色系を特徴とする小針型坏の系統に含めるべきではないのかかもしれない。しかし、大型で口縁が大きく開く点は、他の小針型‘系’坏と遜色のあるものではない。よって、ここでは比企型坏の製作技法で作られたもの、ないしは小針型‘系’坏の影響を強く受けた比企型坏の一種、と捉えておきたい。

G3類は体部がやや浅く、口縁部が長めとなるものである。2段階にのみ認められ、3段階以降は変遷が追えない。

坏II H類 扁平な器体で体部が浅く、口縁端部が屈曲して鎧状になるものである。器壁は「S」字状となり、体部と口縁部の境は至って不明瞭である。

口径と器高の比率から、大型で扁平なもの(H1類)と、小型で深みのあるもの(H2類)に分けられる。

3段階から存在が認められるものの、それ以前のものについては系譜が辿れない。

坏II I類 極めて扁平で、口縁も最大限まで開いたものである。全体的には、坏というよりも皿といった印象が強い。内外両面ともに黒色処理が施される。

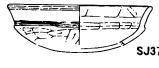
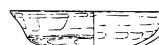
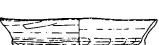
5段階の第472号住居跡1軒のみに認められるもので、どの系統から推移したものか明らかにできない。あるいは有段口縁坏のうち、田中氏がC系列としたものの影響を受けているのであろうか。

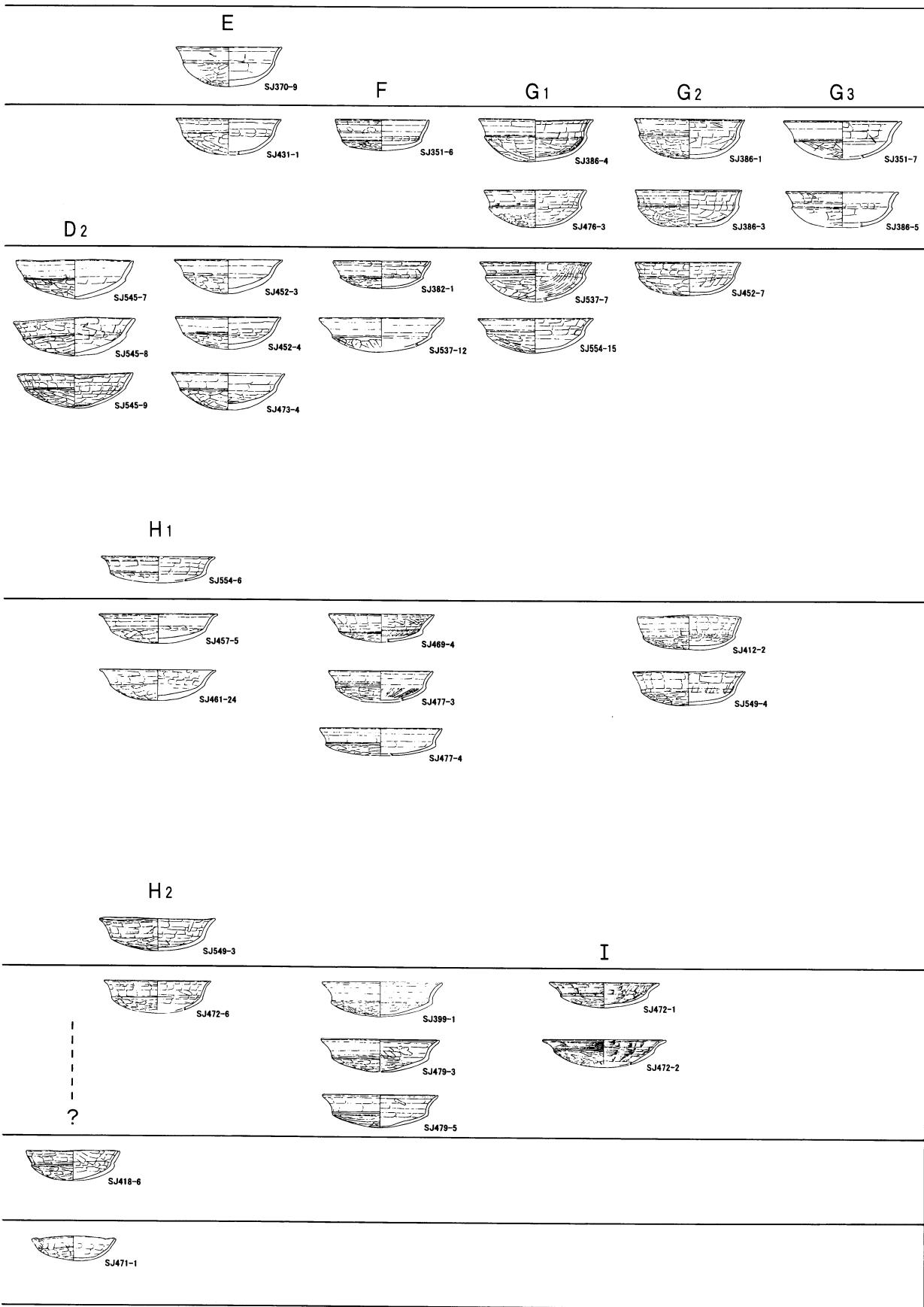
以上、細分に過ぎたきらいはあるが、小針型‘系’坏を9系列に分類してみた。赤色塗彩されたG2類や、黒色処理の施されたI類などは、白色を特徴とする小針型坏の中に含むべきではないかも知れない。これらの全体的な変遷としては、およそ次のように捉えることができよう。

1段階 在来的な須恵器模倣坏の中から、大型で口縁部の大きく開くものが出現する。しかもそれは1タイプだけではなく、体部と口縁部の形態差によって、複数が用意された。

2段階 新たな出現も含め、さらに多くの形態が派

第430図 坯II類（小針型‘系’坯）の細分と変遷

1 段 階	A	B1		B3	C	D1
	 SJ385-7	 SJ370-8				
2 段 階		 SJ431-2		 SJ431-3	 SJ476-2	 SJ445-2
3 段 階			B2	 SJ587-5		
4 段 階	 SJ537-8	 SJ452-2	 SJ452-9	 SJ506-13	 SJ452-10	 SJ382-2
5 段 階	 SJ461-18	 SJ506-7	 SJ537-9	 SJ452-11	 SJ400-4	
6 段 階	 SJ543-1	 SJ506-8	 SJ545-5	 SJ473-3	 SJ400-5	
7 段 階	 SJ554-13	 SJ554-7	 SJ545-6	 SJ545-10	 SJ473-2	
8 段 階	 SJ554-14			 SJ554-11		
9 段 階	 SJ554-18					
10 段 階	 SJ461-15	 SJ457-4	 SJ534-4	 SJ457-8	 SJ412-5	
11 段 階	 SJ461-16	 SJ461-17		 SJ461-21	 SJ412-6	
12 段 階	 SJ461-19			 SJ461-22	 SJ457-7	
13 段 階	 SJ461-20			 SJ461-25	 SJ457-9	
14 段 階	 SJ554-17			 SJ532-7	 SJ461-23	
15 段 階					 SJ461-26	
16 段 階	 SJ472-8	 SJ472-7	 SJ479-4		 SJ485-9	
17 段 階	 SJ485-10		 SJ485-11		 SJ485-12	
18 段 階						
19 段 階						



生する。基本的なものはこの段階にはほぼ出揃い、定形化の前途を模索する。

3段階 出土量は飛躍的に増える。口縁部はより外方へ開いて大型化し、体部は浅く扁平化する。B1・B3・C類が小針型系坏の定型・典型を主張します。

4段階 定形化タイプの一層の大型化と扁平化が進む一方、作りが粗雑化する。またD・E・G類などは、この段階で姿を消していく。

5段階 出土量は激減し、主流(定形化)タイプは小型化する。作りは粗雑となり、口縁の外反と扁平化は極まる。反面、F・I類のように作りが丁寧で、系譜の連れないのであるタイプのものが現れる。

6・7段階 ほとんど全てのタイプは、その姿を窺うことができない。変遷図には掲示したものの、上述したように、D2類とした第418号住居跡出土のもの

(3) 出土土器の変遷(第431・432図)

I期 今回の報告範囲には良好なものが見当たらなかったため、『築道下遺跡II』に収録した第109・143号住居跡の出土土器を転載した。

坏I類は定形化以前の模倣坏で、和泉型の椀類を伴う。この時期の坏類については、前掲報告書で大屋氏が詳細な分析を行なっているので参考されたい。

II期 I期に成立した坏I類は、やや小型で扁平化する。口縁は長めで、直立している。これに伴って坏III類(比企型坏)が出土するようになる。体部は深く、椀状である。甕は長胴化し、甌は大型化する。

III期(坏II類1段階) 坏I・III類に伴って、大型で口縁部の外反した坏II類(小針型‘系’坏)が出現する。坏I類に比して器形は多様であり、器壁もかなり厚い。

IV期(坏II類2段階) 坏I類は大型で口縁部の外反するもの、坏身模倣坏が見られる。

坏II類は大型化し、緒タイプが出揃う。出土する住居跡が急激に増加するのも無視できない。

坏III類は口径が際立って増大し、逆に器高は低く扁平化する。

V期(坏II類3段階) 坏I類のうち、蓋模倣坏は扁平化し、体部と口縁部を分ける沈線は弱くなる。

は、他地域の系統の坏から派生したもの、と考えたほうがよさそうである。

7段階に置いた第471号住居跡出土の坏はこの系列で捉えられなくもない。しかし、かなり異質である。後で触れるように、6段階と7段階は連続するものではなく、土器の変遷からみれば、1時期ほどの間も空く。

もし、6・7段階のものを小針型‘系’坏と位置づけることができれば、それは細々ながらも命脈を保つことになる。しかし、別の系統のものとすると、小針型‘系’坏は5段階で全て消滅することになる。可能性としては、後者のほうが高いように思われる。

次に、こうした小針型‘系’坏出現と変遷の背景を考えるために、築道下遺跡で出土した坏類を中心に、土器群の全体的な変遷を見ておきたい。

坏II類はさらに大型化し、体部は潰れて扁平な器体となる。出土量は飛躍的に増え、集落としても最盛期を迎えた感がある。バリエーションの多様性の中にあって、B1・B3・C類のごとく、定形・典型化が表出してくる。

坏III類は口縁端部の屈曲が弱く、器壁の描く「S」字は緩やかなものとなる。

この段階で、はじめて坏IV類(有段口縁坏)が出現する。口径の大きな扁平な器体で、内湾気味の口縁部は2~3段である。

須恵器の坏は口縁の立ち上がりが急で、端部内面に浅いながらも沈線を残す。MT85~TK43型式古段階のものに並行すると思われる。

VI期(坏II類4段階) 坏I類のうち、身模倣坏はやや小型・扁平化し、内屈する口縁も短くなる。

坏II類は引き続き大型・扁平化が進行する。作りはやや粗雑となり、定形化したもの以外は極端に出土量が減少、ないし認められなくなる。

坏III類も大型・扁平化が窺え、口縁端部の屈曲はほとんどなくなる。

坏IV類は口縁部が外反し、体部との屈曲が弱い。須